



株式会社農協観光より事業運営・事業活動に対する 伝えたい想いや考え、方向性等を紹介

国内外を取り巻く環境は依然として不確実性が高く、急激な円安や原材料・エネルギー価格の上昇が続き、家計や企業活動に重くのしかかっています。また、集中豪雨や猛暑といった気象リスクは、農業のみならず各方面においてリスク管理や適応力強化の必要性を改めて顕在化させています。一方で、賃上げの影響やサービス消費は上昇基調にあり、追い風と逆風が混在する状況となっています。

農業・農村を取り巻く環境は、常態化する異常気象や農業生産現場の変化、地政学的リスクが高まっているなか、「食料・農業・農村基本法」の改正による食料安全保障の強化により、農業の未来を見据えた持続可能な発展を実現することが期待されています。

このような状況において、ＪＡグループでは、日本の食が直面するリスクに対して「国消国産」の取組みを促進するとともに、４月より「食」と「農」を支え、豊かなくらしと活力ある地域社会の実現を目指し「第30回ＪＡ全国大会決議」の実践をスタートしています。

観光業界においては、コロナ禍からの急激な需要回復の落ち着き、物価の急上昇および円安傾向の継続等により、前年からの伸び率は緩やかになると想定される一方で、雇用や賃金の改善効果や訪日外国人の全国への誘致促進等の様々な取組みを通じた観光需要の本格的な回復も期待されます。このようななか当社は、中期事業計画（令和５年度～９年度）の３年目を迎えます。これまで同様にＪＡ活動支援事業を基軸としつつも、「非旅行領域」の成長分野である地域共創事業およびアグリンピア® 事業（農福連携事業）における将来的な事業基盤の確立につながる先行投資および体制整備を本格的に進め、総合的に地域の活性化に貢献する企業となるよう進化してまいります。

株式会社農協観光

絆 11 目次 CONTENTS

巻頭言	1	組織農政通信	18
特集	2	経営の窓口	20
フラッシュ	6	ＪＡゆうき青森NEWS	21
インフォメーション	8	輝き・部会のチカラ	22
あおもり通信	15	新風	23
実践農業者支援	16		

表紙の写真：新・農のある風景 ～其の116～ シャインマスカット収穫最盛期（ＪＡつがるにしきた）

特集

「国消国産の日」 駅前で街頭宣伝

J A 青森中央会

J A 青森中央会は10月16日、国消国産の日に合わせ J R 青森駅前で街頭宣伝活動を行った。同駅利用客や通行人に対し、「国消国産」 P R パンフレットや、県産パックご飯、リンゴジュースなどの県産品300セットを配布。県民理解の醸成を図った。

中央会の乙部輝雄会長は「J A グループ青森は国消国産を通じ、国内の農業に活力を与え、地域の持続的な発展、そして豊かな食生活の実現につ

なげていく。一人でも多くの方に日本の農業の課題を知ってもらい、農業を応援してもらいたい」と力強くあいさつ。

中央会の乙部会長、天内正博副会長をはじめ、県女性協、県青協役員が国消国産の大切さを伝えながら資材を配布をした。資材を受け取った通行人は、「今日仕事で県外からお客さんが来るので、県産品を P R したい。キティちゃんかわいい」と笑顔で話した。



▲県女性協小川副会長（左2人目）・田澤副会長（左）



▲県青協斗沢委員長（右）



▲県女性協松橋会長（右3人目）



▲乙部中央会会長



▲天内中央会副会長（左）

稲刈り特集

昔ながらの「足踏脱穀機」を体験 つがるにしきた

収穫の秋を迎え、鶴田町の小学生が自分たちで育てたもち米を、昔ながらの方法で脱穀した。

J A つがるにしきた管内の鶴田町立鶴田小学校の6年生82人は9月19日、同小学校の駐車場で、昭和中期頃まで使用されていた「足踏脱穀機」で脱穀体験を行った。

今回使用した稲は、6月にJ A や町などが田植え指導を行って植えたもち米「あかりもち」で、刈り取った4分の1の稲を足踏みで脱穀。現在、同町歴史文化伝承館で展示している脱穀機を借りて使用した。

小学生は束ねた稲を持ちながら、回転する脱穀機に擦り付け、丁寧に作業をした。

児童は「足も手も動かして大変。昔の人はよくこれをやっていたなと思う」と話し、米作りの苦労を体験した。児童らは足踏脱穀機の他に「千歯こき」も体験した。

収穫したもち米で、学校や町などが一緒にもちつきを行う予定だ。



足踏脱穀機を体験する小学生

J A 主催の稲刈り体験 地元家族連れが収穫を楽しむ ごしょつがる

J A ごしょつがるは9月27日、五所川原市の佐藤由紀さんの田んぼで「米づくり体験」と題し、稲刈り体験を開いた。5月に田植えを体験した7組の家族連れ24人が参加。稲刈りのほか、米倉庫で米の検査の見学やJ A 職員が栽培したシャインマスカットの収穫などを楽しんだ。

子どもたちは小さな手で鎌を握り、J A 職員から教わったとおりに稲を掴んで「ザクッ」。その音と手応えに面白さを感じ、「できた！もう1回やりたい」と次々と稲を刈り進めた。

参加者らは、佐藤さんの夫、公也さんが操縦するコンバインでの刈り取りの様子も見学し、「すごい」「速い」と声をあげて驚いた。その後、運転席に乗って記念撮影も楽しんだ。

イベントに参加した家族連れは、「普段なかなかできない体験をすることができ、親子で楽しめた」と笑顔を見せた。



稲の手刈りを楽しむ参加者

水稻種子採種圃場稲刈り 十和田おいらせ

十和田市七郷地区にある水稻種子採種圃場（ほじょう）で、県奨励品種の「まっしぐら」の刈り取りが始まった。農産物検査法に基づく検査に合格したものは、来春に県内全域の稲作農家へ供給される。

同地区は県南地域で唯一の指定採種圃場となる。同市水稻採種組合の40戸が計124ヘクタールに作付けし、567.5トンの収量を見込んでいる。品種別では、県奨励品種「まっしぐら」502トン、飼料用米「ゆたかまる」58トン、「あさゆき」7.5トンを採種する。

県農産物改良協会からの委託で生産しており、刈り取りまでに県の関係機関が異品種の抜き取りや畦畔（けいはん）の雑草処理、病害虫発生の有無などを圃場ごとに審査・確認してきた。

刈り取りは9月8日から本格化し、種子用コンバイン5台がフル稼働。種子の専用施設に搬入され、乾燥・調整後、発芽試験を経て各JAへ供給される。

高温障害の影響を懸念する同組合の畑中修組合長は「刈り取りし、乾燥・調整しなければ歩留まりはわからない。良い種を届けられるように、適期刈り取りに力を尽くす」と話す。



刈り取った種子の状態を確認する畑中組合長

みよこ米収穫

ゆうき青森

JAゆうき青森管内の七戸町天間林地区で特別栽培米「みよこ米」の収穫が最盛期を迎えた。今年は生育が順調に推移し、収穫作業は9月までにほぼ終了した。

みよこ米の品種は県内主力品種の「まっしぐら」。農薬と化学肥料の使用を普通栽培に比べて50%以下に減らして栽培されている。本年度は9人の生産者が15㍑を作付けし、収量は1,260俵（1俵60kg）と計画している。

子どもたちに安心して食べてほしいという思いから、近隣の学校給食用として主に出荷。昨年度は同町のふるさと納税返礼品にも登録され、数量限定で販売した。

JAのみよこ米協議会会長を務める同町の小又政幸さんは、約2㍑を付け、9月16日から収穫を



「みよこ米」の収穫作業を進める小又さん

開始した。小又さんは「収量、品質ともに平年並みだと思う」と評価。「お米は一番の基本。安全・安心な米を食べて健康に育ってほしい」と笑顔で語った。

おおぞら小稲刈り

おいらせ

三沢市立おおぞら小学校の4～6年生は9月22日、農事組合法人フラップあぐり北三沢の圃場で稲刈りを行った。

代表児童は、「大切なお米を無駄にしないよう『稲はいっぱい感謝もいっぱい』を合言葉に稲刈りをしましょう」とあいさつをし、鎌を使って手作業で刈り取っていった。

児童らは、JAおいらせ青年部三沢地区部員がサポートする中、刈り取り作業を行った。

5月の田植えから秋の収穫まで、同JA青年部の協力のもと、農事組合法人フラップあぐり北三沢の圃場を借りて、米作りへの理解を深める学習を行っている。児童は、「お米がどのようにできるのかを知れた。お米の大事さが分かった」と感想を述べた。

収穫したもち米「あかりもち」は校地内で天日干しし、「おおぞら米」として12月頃に地域の方々への販売を目指している。



稲を刈る児童ら

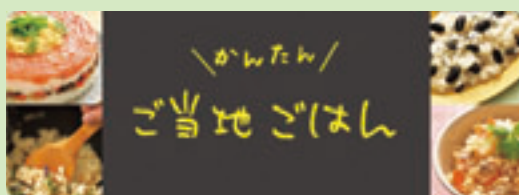




楽しい、とっておき。 お米の美味しさ、新発見!

お米の美味しさを満載したレシピサイトです。ぜひご覧ください。

地域のJAで、食、農、くらしに関心のある女性たちが集う「JA女性組織 (JA女性部)」の皆さんが考えました。



JA女性組織ならではの、全国各地における地元の食材を生かした、美味しいとっておきのレシピ。

簡単アスパラの炊き込みご飯

北海道 JAびばい女性部



アスパラを炊き込む斬新な発想。レモンが爽やか。ご飯とアスパラの甘さと食感の絶妙なハーモニーを楽しもう!

他にもお米が主役のご当地レシピがいっぱい!



春にんじんのキンパ

徳島県 JA徳島県女性部



お米のミルフィーユ

宮城県 JA名取岩沼 美田園支店女性部



いちごいなり

静岡県 JAふじ伊豆女性部 伊豆の国地区

レシピはこちらから



子どもたちも大喜び。全国47都道府県の食材を使った「ご当地どんぶり」レシピを一挙公開。

まいど!!大阪うまいどん

大阪府 JA大阪女性協議会



しゃきしゃきキャベツの上に、水なすと豚肉の甘酸っぱいはさみ揚げ。ご飯が進む栄養バランス抜群の元気どんぶり!

他にも全国から自慢のどんぶりが大集合!



もちもちレンコンバーグ丼

長野県 JAグリーン長野女性部



カレー風味のトマト丼

島根県 JAしまね西いわみ女性部



長崎ちゃんぽん丼

長崎県 JA長崎県女性組織協議会

レシピはこちらから



JAグループの取り組み

国産の豊かさを次の世代へ

JA グループは、お米をはじめとする、私たちの国で消費する食べものは、できるだけこの国で生産する「国消国産」を進めています。



詳しくはこちらから



耕そう、大地と地域の未来。JAグループ

フラッシュ

JA青森



組合長による集出荷施設巡回（9/22～10/3）

鹿内克之組合長は、JA青森管内の集出荷施設13カ所を巡回した。繁忙期を迎えた米倉庫やライスセンター、カントリーエレベーター施設では作業の進捗状況を確認し、鹿内組合長自ら米の品質を確かめた。また、各施設の担当職員へは、感謝と激励の言葉を掛けるとともに安全に作業するよう呼びかけていた。

JAごしょつがる



小学生が米施設見学

きづくりカントリーエレベーター（10/8）

つがる市立向陽小学校5年生54人は、きづくりカントリーエレベーターを見学した。社会科学習の一環として、米の収穫後の流れや農業施設の役割を学んだ。

児童らはJA職員の説明を受けながら、乾燥や調整の工程、施設全体の設備を管理する操作室を見学。「1日にどのくらいの米が入ってくるのか」「もみがからから玄米にするまでどのくらい時間がかかるか」など積極的に質問し、地域農業と米づくりの仕組みへの理解を深めた。

シャインマスカット親子収穫体験（9/13）

相馬こども園支援センターを利用する親子45人がシャインマスカットの収穫体験を行った。

参加者は袋に入ったシャインマスカットを下から持ち上げたり、袋の中を覗いたりしながら、持ち帰るシャインマスカットを一生懸命に選んでいた。小雨が降る中だったが、帰る際の足取りは軽やかで、笑顔があふれる収穫体験となった。



JAつがるにしきた

秋の实りをお届け 新鮮野菜 女性部が販売（10/10）

女性部深浦支部は、深浦事業所前で「収穫祭」を行った。約20品目の野菜や果物は、開始から1時間半で完売した。

この収穫祭は毎年1回開催され、7年前から女性部員によって継続されている。販売している野菜などは、女性部員の畑で丹精込めて育てたもので、品目が多く値段も安価な事から、地元の多くの方々に喜ばれている。

買い物に来たお客さんは「旬な野菜が揃っていて、とにかく安い。来て良かった」と話した。



JAつがる弘前

JAつがる弘前ブランド「夢ひかり」初売り（10/3）

出荷した2025年産の早生ふじ「夢ひかり」の初売りが、大田市場の東京青果と大阪市場の大果大阪青果で行われた。東京に740ケース（1ケース10[※]）、大阪に1,005ケースを出荷した。平均価格は東京が1ケース6,591円、大阪が7,030円での取引となり、過去10年で3番目の高値となった。

大田市場に出向いた天内正博組合長は「着色良好で糖度が高く品質の良いリンゴに仕上がっている」と「夢ひかり」をアピールした。



JA相馬村



JA津軽みらい

他JAのイベントで農作物を販売（9／21）

青果部は、JAゆうき青森の合併15周年記念JAまつりに参加し、JA間の交流と農作物のPRを目的とした販売会を行った。

この日は早生種リンゴのサンつがる、桃のシロップ漬、トウモロコシを販売。青果部職員が、来場者に農作物の特徴や産地、食味などについて説明しながら対面販売を行った。

来場者は「やはり津軽地方で栽培されたリンゴはともおいしい。南部地方では津軽地方の農作物を食べる機会はあまりないので、購入できてうれしい」と笑顔で話した。



JAゆうき青森

JAまつりでロール乾草転がし大会（9／21）

東北町の本所前特別会場で合併15周年を記念したJAまつりを開催した。親子連れや地域住民など約1,500人が訪れ、スイカ割り大会やロール乾草転がし大会などを楽しんだ。

ロール乾草転がし大会では老若男女27人が参加。3人1組となって約400kgの乾草ロールを往復20m転がして速さを競った。参加者は「酪農が盛んなJAらしい大会で楽しかった」と笑顔を見せた。



JA十和田おいらせ

ニンニク植え付けピーク（10／8）

ニンニクの植え付け作業が本格化している。JA管内の作付面積は、JA登録分で250ヘクタール（種子分を除く）を見込んでいる。

藤坂支店管内で50年以上ニンニク栽培をする附田常雄さんは「雪が降るまでは葉数を4枚程度に抑えることが大切。雪の下で冬眠させることでおいしいニンニクができる。来夏も大きく元気なニンニクを収穫したい」と意気込んでいる。



JAおいらせ

ウェナッチバレー使節団収穫体験（10／3）

三沢市と姉妹都市を結ぶ米国ウェナッチ市と東ウェナッチ市のウェナッチバレー姉妹都市友好親善使節団は、谷地頭にあるゴボウ畑で収穫体験をした。

指導課の職員がゴボウを収穫する様子を見せた後、団員らは力いっぱいゴボウを抜いて収穫を楽しんでいた。また、ゴボウを高々と掲げ喜んだり、ゴボウに関する質問がたくさんあったりと、とても興味を示していた。

三戸ふれあいまつり（9／28）

三戸支店駐車場で、さんのへ秋まつりの最終日に合わせて、「ふれあい祭り」を開いた。屋台では、三戸支店のフランクフルト、青壮年部まべち支部の焼き鳥、女性部三戸地区の串もち、(株)ぱるじゃサービスのパヴァーアイスなどを販売。来場者はビールを片手に、屋台で購入した商品を食べながら、山車を楽しんだ。

高松和男支店長は「3年連続の開催となったが、たくさんの方々に来場していただいた。有意義なふれあい祭りができた」と話した。



JA八戸

2025国際協同組合年にかかる県知事要請実施

国際協同組合年（IYC2025）を迎え、2025国際協同組合年青森県実行委員会は9月22日、協同組合が地域社会に果たしている役割や価値について「学び」・「実践」・「発信」を通じて県民に広く認知してもらおうと、青森県庁で要請を行った。

同委員会の乙部輝雄委員長（JA青森中央会会長）が宮下宗一郎青森県知事に要請書を手渡し、①協同組合が実施する、育成・発展および持続可能な開発目標（SDGs）達成に準ずる事業に対し、助成金等を活用した支援②協同組合の意義と役割について、広報誌、SNS、体験学習やイベントなどを活用し、広く県民全体に対する周知等について要請した。乙部委員長は「本県における協同組合の取り組みや今後の展望について、県としてのご理解とご支援をお願いしたい」と述べた。

また記者会見では、IYC2025における本県の今後の取り組みを公表。記念集会の開催や、協同組合を解説したパンフレットの作成などを計画している。

要請者は次の通り。カッコ内は所属団体。左から坂本典孝（ワーカーズコープ北東北事業本部本部長）、蛭沢正勝（県森連会長）、乙部輝雄（JA青森中央会会長）、宮下宗一郎（青森県知事）、菅原正（県生協連会長）、二木春美（県漁連会長）。



▲要請書を渡す乙部委員長（左から3人目）

みんなのころざしフェスタに出展

JA青森中央会は9月28日、青森市のCiiNA CiiNA 青森で行われた「みんなのころざしフェスタ」にブースを出展した。同イベントは青森県社会福祉協議会と全国食支援活動協力が主催となっており、各企業や団体の社会貢献活動の取り組みを紹介することを目的としている。

中央会では押し花のように乾燥させた「押し野菜・果実」を使ったハーバリウム、スマホラベル、しおりを作成できるワークショップを実施。野菜

や果物を使ったワークショップを体験してもらうことで、消費者に対し国消国産運動、食農教育をPRした。

15分程度で見栄えの良い小物を作れると好評。出展したブースには約100人が参加し、「この野菜かわいい！」と楽しそうに話しながら作成した。特にハーバリウムは大人気で、午前中に出尽くした。

あわせて中央会や県内JAが青森県社会福祉協議会と連携し、取り組んでいる社会貢献活動をパネル展示形式で紹介。またワークショップ参加者に持続可能な開発目標（SDGs）などJAの取り組みを紹介するパンフレットを配布した。出展した中央会職員は「初めての出展だったが、ワークショップは想定をはるかに超える人気で、子どもたちや家族連れに農業や国消国産をPRできた」と話した。



▲ハーバリウムを作る参加者



▲人気のハーバリウム

令和7年度協同組合間提携5団体合同施設見学会

青森県内の協同組合で構成している協同組合間提携青森県実行委員会は10月2日、合同施設見学会を実施した。同見学会は、提携する協同組合がお互いを知る場を設け、願いや課題を相互理解することを目的として開催し、各協同組合の役職員

18人が参加した。

4回目となる今回は青森県生活協同組合連合会施設の「あおもりコープフーズ」を見学し、同組合の担当者より、コープあおもりと青森保健生協の共同事業「給食・配食事業」について説明を受けた。この取り組みは、医療福祉生協と購買生協が力を合わせ、「青森県民のくらしを守ること」に貢献することを目指したものである。

担当者は「事業を通じて青森県における福祉の向上に貢献していく。また地元の生産者や加工業者と連携し、地産地消を推進していきたい」と話した。昼食には給食・配食事業で実際に提供されている弁当をいただいた。



▲あおもりコープフーズで給食・配食事業に用いる食材の調理作業を見学する参加者

柏木農業高校生徒によるＪＡ津軽みらい施設見学会

ＪＡ青森中央会とＪＡ津軽みらいは10月15日、青森県立柏木農業高校の生徒を対象にＪＡの施設見学会を開催した。同校１年生35人の生徒が参加した。

午前はＪＡ津軽みらいの平川カンントリーエレベーター（ＣＥ）や、黒石中央りんごセンターのリンゴ貯蔵施設など営農施設を中心に見学するとともに、ドローンのデモンストレーションを見学した。

午後はＪＡ津軽みらい本店にて、同ＪＡの概要や今後の取り組みについて学習した。

また若手職員との意見交換も行った。職員は１



▲スケジュールを説明する若手職員

日の業務について普段のスケジュールと繁忙期を比較しながら説明した。生徒からはＪＡに就職しようと思ったきっかけや、仕事でやりがいを感じたことなど多くの質問があり、職員は丁寧に回答していた。

参加した生徒は「普段見られない設備を見ることができ、楽しかった。職員さんから話を聞いて、ＪＡを就職先として考えてみたい」と感想を述べた。



▲黒石中央りんごセンターを見学する生徒

ゴボウ収穫体験ツアー

ＪＡグループ青森は10月18日、三沢市で東奥日報社の女性倶楽部（くらぶ）「女子〇（ジョシマル）」のイベント「ゴボウ収穫体験ツアー in 三沢」を開いた。同倶楽部の会員28人が参加し、収穫体験からスイーツづくりまで終日青森県産ゴボウを楽しんだ。

本イベントは食農教育をテーマに県産食材にスポットを当て、収穫体験や食事などを通じ農業を学ぶ場として開催している。ゴボウ生産量日本一の青森県の中でも、高い生産量を誇る三沢市産のゴボウの魅力を体感してもらう事を目的としている。

収穫体験は、三沢市にあるＪＡおいらせ組合員の浄法寺哲也さんの圃場で実施。参加者は浄法寺さんと同ＪＡ職員より栽培方法や収穫の仕方について説明を受けたあと、機械で掘り上げたゴボウを収穫した。

参加者は「ゴボウの葉っぱを初めて見た。どれ



▲ゴボウを収穫する参加者

くらいの太さのゴボウがおいしいの？」と浄法寺さんやＪＡ職員に質問しながら作業を行った。その後、同ＪＡ管内の六戸野菜センターでゴボウの選別、箱詰めなどの選果見学を行った。

昼食は「ベジキッチンまいまい」特製のゴボウなど地元食材を使用した弁当を堪能。昼食後は「空飛ぶごぼうPROJECT」の金淵良子さんが講師となり、生米を使ったゴボウのパウンドケーキを作った。



▲パウンドケーキをつくる参加者



行事 (11/10～12/10)

11月

- 11日 組織再編検討会議 専門部会【津軽・販売「米穀」「やさい」第1回】(ＪＡごしょつがる本店)
- 12日 組織再編検討会議 専門部会【津軽・販売「りんご」第1回】(ＪＡごしょつがる 本店)
- 12日 参協定例会 (アップルパレス青森)
- 12～13日 ＪＡ総務管理担当常勤理事会議視察研修 (岩手県)
- 13日 リーダーシップ研修会 (県農協会館)
- 13日 組織再編検討会議 専門部会【県南・販売「やさい・果実」第1回】(ＪＡおいらせ 本店)
- 14日 組織再編検討会議 専門部会【県南・販売「米穀」「畜産・酪農」第1回】(ＪＡおいらせ 本店)
- 19日 内部監査・リスク管理担当者部課長会議 (県農協会館)
- 22日 国消国産マルシェ 2025 (青森市総合体育館【カクヒログループスーパーアリーナ】)
- 22日 認証上級試験 (県農協会館)
- 28日 新任非常勤役員研修会 (県農協会館)

12月

- 1日 組織再編検討会議 専門部会【津軽・販売「りんご」第2回】(ＪＡつがる弘前 河東地区りんご施設)
- 2日 組織再編検討会議 専門部会【津軽・販売「やさい」「米穀」第2回】(ＪＡつがる弘前 河東地区りんご施設)
- 2～3日 中堅職員研修会2 (県農協会館)
- 5日 組織再編検討会議 専門部会【県南・販売「畜産・酪農」第2回】(ＪＡ八戸 営農経済本部)
- 5日 第50回青森県ＪＡ青年大会 (県農協会館)
- 8日 組織再編検討会議 専門部会【県南・販売「米穀」「やさい・果実」第2回】(ＪＡ八戸 営農経済本部)
- 8日 定例理事会 (県農協会館)
- 9日 令和7年度青森県家の光大会 (県農協会館)
- 10日 退職準備セミナー (県農協会館)

ライフプランサポーター養成講座の実施

JAバンク青森では、10月23、24日に2025年度ライフプランサポーター養成講座の第三講を実施した。

ライフプランサポートとは、ニーズに寄り添った提案型セールスを実践することで取引深耕をはかるための取り組みであり、JAにおけるライフプランサポートのけん引役となる人材の育成を最大の目的としている。

6月から2025年度のライフプランサポーター養成講座を順次実施し、今回は主に資産形成、相続、FP知識を活用し、セールスの現場でいかすことを推進するもの。資産形成の必要性や、株式や投資信託商品の特征、相続関連の基礎知識から活用例を講師が解説し、4グループに分かれてグループワークを実施した。

グループワークでは、様々な状況を想定した顧客に対する説明方法等を話し合い、共有することで顧客のニーズに合わせた実践的なセールスについて学びを深めた。



▲イベント当日の様子



法人IB異名義送金拒否機能実装開始

JAバンク青森では、近年急増する金融犯罪への対策として、警察庁および金融庁が連名で金融機関に要請した「暗号資産交換業者あての異名義送金拒否」に対応するため、10月20日から法人JAネットバンク（以下「法人IB」という。）における異名義送金拒否機能を実装している。

本機能は、法人IBを通じて暗号資産交換業者あてに行われる送金のうち、口座名義人名と異なる振込依頼人名による取引を自動的に検知・拒否する仕組みである。

これにより、特殊詐欺等による被害金の資金洗浄を未然に防ぐとともに、利用企業に対しては電話等による取引先の実態確認を行い、万が一、金融犯罪の疑いがある場合には、該当する貯金取引の停止や法人IBサービスの利用停止といった措置を講じることで、被害の拡大を防止するもの。

その他、ネットバンク不正利用防止策についても順次実施し、JAバンク全体として、金融犯罪の抑止と利用者の安全確保に向けた取り組みを一層推進していく。



行事 (11/10～12/10)

農林中央金庫

11月

- 13日 JAバンク青森運営協議会専門委員会（県農協会館）
- 18～19日 相続相談対応研修（＊）

12月

- 4～5日 資産形成(クロージング編)(県農協会館)
- 9日 青森県JA信用担当部課長会議(県農協会館)

＊はウェブ開催

「青天の霹靂」新米発売記念イベントの開催

ＪＡ全農あおもりは10月11日、「青天の霹靂」新米発売記念イベントを、ユニバース ラ・セラ 東バイパス店 1階特設会場にて開催した。

イベントでは、青森県産米を購入した方を対象にユニバースで使える商品券や県産米パックご飯セットが当たる抽選会を行い、新米「青天の霹靂」の試食も実施した。

さらに、会場ではお米大使によるミニゲームやクリーンライスレディあおもりによるＰＲも行われ、会場を盛りあげた。

新米「青天の霹靂」は、全農あおもりの直売店「アグリショップ青森店」（電話017-735-5318）や、ＪＡ全農が運営する産地直送通販サイト・ＪＡタウン「ＪＡ全農あおもり」で販売している。



▲「青天の霹靂」新米発売記念イベントの開催

やさい作品コンクール審査会の開催

ＪＡ全農あおもりは10月15日、青森市の県農協会館で「やさい作品コンクール審査会」を開き、入賞作品を選んだ。

県内177校の小学校から4064点（内訳＝図画552点、習字3512点）の応募があり、審査員の6人が審査した。

図画は、好きなやさいや夢のやさいの生育・作業状況など、やさいに関するものをテーマとし、習字は半紙・条幅ごとに課題を指定した。

審査委員長の青森市立本郷小学校、和田可矢毅教頭は「コンクールを通じて、子供たちに小さい頃から県産やさいに親しんでもらうことや、地産地消の意識を持ってもらいたい」と話した。

入賞作品は、11月15日に青森県産業会館、29日～30日に青森県総合社会教育センターに展示される。



▲審査する関係者ら

青森米販売対策会議の開催

ＪＡ全農あおもりは10月20日、青森市で青森米販売対策会議を開いた。県外の米穀卸売業者や県内ＪＡ、青森県から代表者らが出席し、令和7年産米の取組みや作柄状況の共有、取扱対策について協議した。

青森県の令和7年産主食用米の予想収量は前年産に比べ、4万トンの増の26万トンと大幅な増産が見込まれ、増産に伴い、集荷数量を7万6224トン（前年比111%）とした。

各産地での庭先相場は、集荷競争の激化から令和6年産米を大幅に上回る価格となり、消費の減退および業務用輸入米へのシフトによる国産米需要の減少が懸念される。

全農あおもりは、概算金の早期提示等に取り組むことで集荷を確保し、供給責任を果たすとした。また、早期契約・販売に取組み系統共販の優位性を発揮し、令和8年産以降の集荷にもつなげる。

全農あomorい運営委員会の乙部輝雄会長は「米穀の情勢は、昨年からの需給ひっ迫により米価が高騰している。一方で、急激な価格上昇による買い控えがみられ、今後の販売への影響が懸念される。本会が果たすべき役割は、確実に米を集荷し、供給をすることに加え、令和8年産米に向けて生産者と消費者が互いに納得できる販売価格を模索すること。卸売業者と連携しながら販売を進めていく」と述べた。



▲令和7年産米の取扱いについて協議する出席者

行事（11/10～12/10）

11月	
15日	全農フェス（産業会館）
12月	
1日	令和7年産主要やさい販売対策会議（Luz大森 会議室（東京都大田区））
4日	令和7年産中・晩生種りんご販売対策会議（Luz大森 会議室（東京都大田区））
8日	運営委員会（農協会館）

令和7年度 JA共済青森県小・中学生 第69回書道コンクール 第48回交通安全ポスターコンクール審査 会の開催

JA共済連青森は、9月27日（土）青森県農協会館において、令和7年度JA共済青森県小・中学生書道コンクール・交通安全ポスターコンクール審査会を開催した。

両コンクールは、共済事業の理念である相互扶助と思いやりの精神を次代を担う小・中学生へ伝えていくとともに、児童・生徒の書写教育に貢献することを目的に「書道コンクール」を、児童・生徒の図画工作・美術教育の高揚と交通安全思想の普及・浸透を図ることを目的に「交通安全ポスターコンクール」を開催しており、地域貢献活動（文化支援活動）の一つとなっている。

書道コンクールは昭和32年度にスタートし今年度で69回目、交通安全ポスターコンクールは昭和53年度からスタートし今年度で48回目となり、規模・歴史・質ともに県内屈指のコンクールとして高い評価をいただいている。

今年度の応募作品は、書道が308校から6,067点、交通安全ポスターは105校から441点の応募があった。審査会当日は、書道・交通安全ポスターの審査委員10名が会場に集まり、書道は鎌田雨溪審査委員長、交通安全ポスターは宮本益衛審査委員長を中心に審査が行われた。

各審査委員の厳選なる審査の結果、書道半紙の部・条幅の部および交通安全ポスターの部あわせて、最優秀賞27点、特選27点、準特選27点、奨励賞81点が選出された。各部門の最優秀賞を受賞した作品は県代表作品として全国コンクールへ出品

される。

なお、10月29日（水）に青森県農協会館において、最優秀賞受賞者、優秀学校賞受賞校の代表者を招いた表彰式が執り行われる。表彰式終了後には、県内3か所で入賞作品の展示会を予定しており、創造力と努力の成果が広く紹介される。



▲書道コンクール審査会の様子



▲交通安全ポスターコンクール審査会の様子

令和7年度 JA共済青森県小・中学生 第69回書道コンクール・第48回交通安全ポスターコンクール展示会開催のお知らせ



次の日程で開催いたしますので、ぜひご来場ください。
なお、作品の展示は、最優秀賞・特選・準特選受賞作品とし、奨励賞の展示はございませんのでご注意ください。



© 2006 JA-KYOSAI

開催日	時間	場所
11/ 8（土）・9（日）	10：00～17：00	【青森市】 CiiNA CiiNA 青森（2階ホール）
11/15（土）・16（日）	10：00～17：00	【おいらせ町】 イオンモール下田（2階イオンホール）
11/22（土）・23（日）	10：00～17：00	【弘前市】 さくら野百貨店弘前店（4階エスカレーター前ホール）

J A 共済きずなの青い森プロジェクトの開催

J A 共済連青森は10月3日、J A 共済ビジネスサポート株式会社と森林組合あおもりの協力ののもと、「J A 共済きずなの青い森プロジェクト」を平内町（弁慶内地区）で開催し、J A 青森女性部の部員や平内町役場職員など総勢45名が参加した。

“森”を自然と触れ合う教育の場として活用し、様々な体験を通じて森が地域や農業にもたらす恩恵や役割の理解を深めてもらうとともに、参加者同士のきずなを深めることを目的とし平成29年度から開催している。

当日は、森林プログラムとして除間伐や下刈りの作業見学を行い、参加者はヒバの苗木の植樹にも挑戦。慣れない作業に苦戦しながらも、笑顔で楽しむ姿が印象的だった。



▲参加者の皆さん

また、食育プログラムでは、食品ロスや食育に関するクイズを通じて現代の「食」について学び、午後には平内消防署の協力のもと、濃煙体験や起震車による地震の擬似体験を通じて防災意識を高めた。

木工クラフトプログラムでは、ヒバ材を使った組子製作に挑戦し、参加者同士が協力しながら作品を完成させて、森と人とのつながり、そして参加者同士の絆を深める貴重な機会となった。



▲植樹体験する様子



▲平内消防署にて起震車体験



▲木工クラフトで組子製作に挑戦

共済事業担当常勤理事会議の開催

J A 共済連青森は10月2日、アートホテル青森にて共済事業担当常勤理事会議を開催した。

開会にあたり葛西本部長より「推進活動をはじめとした事業活動全般においてご尽力いただいていることに感謝申し上げます。全国各地で発生している自然災害や豪雨などで建物や農作物への被害が多くあるが、あらためて未保障・低保障の解消に向けた保障点検の強化を図るべく、L A やスマサポの3 Q 活動を後押しいただきたい。」と挨拶した。

会議では、第2四半期の取組み状況の報告・共有のほか、J A 普及推進目標達成に向けた下半期の取組み、令和8年1月に予定されている自動車共済の仕組改訂・共済掛金率変更、共栄火災商品の販売強化に向けた取組みなどが協議された。



▲開会のあいさつをする葛西本部長

行事 (11/10～12/10)

11月

- 13日 生命共済J A 審査員有資格者研修会（オンライン）
- 15～16日 書道・交通安全ポスターコンクール入賞作品展示会（イオンモール下田）
- 20日 建物共済J A 審査員有資格者研修会（オンライン）
- 22～23日 書道・交通安全ポスターコンクール入賞作品展示会（さくら野百貨店弘前店）
- 27日 J A 自動車契約担当者審査員有資格者研修会（オンライン）

12月

- 8日 運営委員会（県農協会館）



あおもり通信

連絡先

農林水産省東北農政局

青森県拠点地方参事官室

TEL: 017-775-2151

— 農林水産省からJA関係者へ情報発信 —

令和7年産 水稻の作付面積及び9月25日現在の予想収穫量（青森）

令和7年産主食用米収穫量（生産者が使用しているふりい目幅ベース）は前年産に比べ3万9,700 t 増加

1 令和7年産水稻の9月25日現在における生産者が使用しているふりい目幅ベースの予想収穫量（主食用）は26万2,200 t で、前年産に比べ3万9,700 t 増加と見込まれます。

これは、作付面積（主食用）が前年産に比べ6,500ha増加の4万3,700haと見込まれることに加え、9月25日現在における10a 当たり予想収量（生産者が使用しているふりい目幅ベース）は、出穂期以降おおむね天候に恵まれ、千もみ当たり収量がやや多く見込まれることから、前年産に比べ2 kg増加の600 kgと見込まれるためです。

2 作況単収指数は102と見込まれます。 各作柄表示地帯の作況単収指数は表のとおりです。

〔参考〕 令和7年産水稻の9月25日現在のふりい目幅1.70mmベースの予想収穫量（主食用）は27万1,400 t で、前年産に比べ3万9,600 t 増加と見込まれます。〕

表 令和7年産水稻の作付面積、10a 当たり予想収量及び予想収穫量（9月25日現在）

区 分	作付面積 (青刈り面積を含む。)	作付面積 (主食用)	生産者が使用している ふりい目幅で選別			ふりい目幅1.70mmで選別			作況 単収 指数
			10a 当たり 予想収量	対前年比	予想収穫量 (主食用(生産者ふりい 上米)) ④=②×③	10a 当たり 予想収量	対前年比	予想収穫量 (主食用(生産者ふりい下米 を含む。)) ⑥=②×⑤	
	①	②	③			⑤			
青 森	ha	ha	kg	%	t	kg	%	t	
青 森	49,300	43,700	600	100	262,200	621	100	271,400	102
津 軽	5,780	...	589	101	...	615	102	...	102
南部・下北	29,300	...	606	99	...	626	98	...	100
南部・下北	14,200	...	591	103	...	613	103	...	107

注：1 作付面積（青刈り面積を含む。）(①)とは、青刈り面積を含めた水稻全体の作付面積である。

2 作付面積（主食用）(②)とは、青刈り面積を含めた水稻全体の作付面積から、備蓄米、加工用米、新規需要米等の作付面積を除いた面積である。

3 生産者が使用しているふりい目幅で選別された10a 当たり予想収量 (③) 及び予想収穫量（主食用（生産者ふりい上米））(④) は、生産者が使用しているふりい目幅で選別された玄米の重量である。

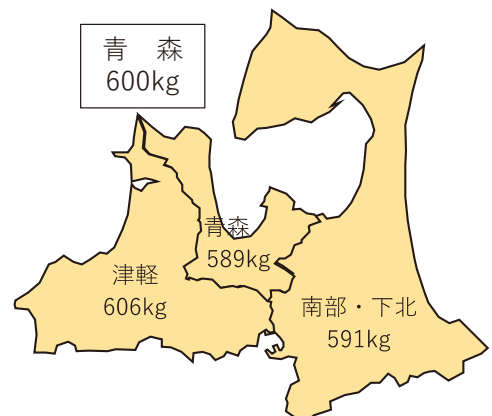
4 生産者が使用しているふりい目幅で選別された10a 当たり予想収量 (③) については、過去5か年に生産者が使用したふりい目幅の分布において、最も多い使用割合の目幅（青森県は1.90mm）で選別された玄米を基に算出した数値である。

5 10a 当たり予想収量 (⑤) 及び予想収穫量（主食用（生産者ふりい下米含む。））(⑥) は、1.70mmのふりい目幅で選別された玄米の重量である。

6 作柄表示地帯別の作付面積（主食用）、予想収穫量（主食用（生産者ふりい上米））(④) 及び予想収穫量（主食用（生産者ふりい下米含む。））(⑥) については、新規需要米（飼料用を含む）、備蓄米、加工用米等の作付面積（9月15日時点）を把握していないことから「…」で示した。

7 作況単収指数は、生産者が使用しているふりい目幅ベースで算出した10a 当たり収量の前年産までの5か年中3年平均（最高、最低除く。）に対する10a 当たり予想収量の比率である。

図 作柄表示地帯別10a 当たり
予想収量(9月25日現在)
(生産者が使用しているふりい目幅ベース)



※10月25日現在の水稻の予想収穫量については、11月中旬に公表を予定しています。

実践 農業者支援

外国人材の活用による農業労働力確保 ～農業分野では派遣形態で受入可能～

1. 労働力人口の減少で地方には課題が山積

日本の総人口は約1億2,400万人（2023年）で、2008年以降は減少局面を迎えており、今後も減少傾向が続くと予測されています。このうち、65歳以上は約3,600万人で、総人口の約29%を占めています。本県の総人口は約118万人、65歳以上は約42万人で、総人口の約35%を占めており、国の予想では2050年には48%を超え、本県では総人口の2人に1人が高齢者になる見込みです。

高齢化による社会への影響は①労働力人口の減少 ②社会保障費の増加 ③過疎化や限界集落の増加など、特に地方を中心にさまざまな課題が生じてきます。



2. 農業分野における労働力不足も進行

農業従事者の平均年齢は約67歳（2023年）と高齢化が進行しており、農業従事者の数も減少傾向にあります。農村の人口減少・高齢化だけを考えても、今後の農業労働力確保がますます厳しくなることが容易に想像できます。栽培作物や経営規模によって違いはありますが、農業は体力的にきつい仕事が多く、天候や季節によって仕事量が大きく変動するため、人が集まりにくい職種とされています。

また、作物によって農繁期と農閑期の必要な労働力の差が大きいと、労働者の年間雇用が難しく、産地では収穫時期が重なるため、労働力不足により収穫をあきらめるといった事例も報告されています。

3. 労働力確保への対応

このような中、国は新規就農者等の担い手育成と併せて、作業代行やスマート農業技術の有効活用による生産性向上支援をはじめ、データ分析やドローン散布等の作業受託、農業機械のシェアリング、農業現場への人材供給などの『農業支援サービス』を強化することとしています。

また、国内の人材確保が困難な分野において、一定の専門性・技能を有し、即戦力となる外国人材を受け入れる「特定技能制度」が農業分野でも2019年に開始。2024年には、熟練した技能を持つ外国人材に長期就労が可能な「特定技能2号」の対象分野に農業が追加されるなど、労働力としての外国人材の活用が注目されています。



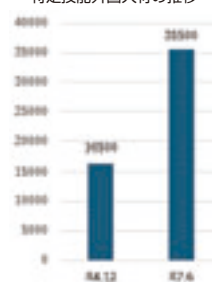
4. 農業分野における外国人材の活用

現在、外国人材の受け入れ制度として「特定技能」と「技能実習」の制度があります。「技能実習」は日本で農業技術を学んでもらい、母国に技術を持ち帰る国際協力が基本の制度です。一方、「特定技能」は国内の人手不足に対応するための労働力を確保するための制度になります。なお、2027年には「技能実習制度」が終了し、新たに「育成就労制度」がスタートします。

農業分野の特定技能による外国人材受入状況は、2025年6月時点で約3万5千人（うち青森県550人）と3年前と比較すると約1万9千人増加しています。

特定技能による外国人材を雇用する際に課題となるのが『申請手続きが複雑』『義務的支援の負担』が挙げられます。このため、多くの受入企業（特定技能所属機関）は、人材紹介会社等の登録支援機関に委託をすることになります。委託を受けた登録支援機関は、特定技能外国人を支援するための計画や各種支援（義務的支援、任意的支援）の計画を立案し、受入企業と連携して支援することになります。この支援を受けるために「特定技能外国人1人あたり〇万円」という手数料が発生するのでコストが増加

特定技能外国人材の推移



してしまいます。

なお、登録支援機関となった企業・団体は、四半期に1度、適正に特定技能外国人を支援できているかを行政機関へ報告する義務があります。

<特定技能による外国人材雇用の効果と課題>

効果

- | | |
|-------------|--------------------------------|
| ①安定した労働力の確保 | 特定技能1号は最長5年、2号は通算制限無しに雇用（更新必要） |
| ②即戦力の確保 | 技能実習制度と異なり、基礎スキルとコミュニケーション能力 |
| ③フルタイム勤務 | 日本人従業員と同様にフルタイムで雇用可能 |

課題

- | | |
|------------|--------------------------------|
| ①申請手続きが複雑 | 在留資格の申請等の書類作成 |
| ②義務的支援の負担 | 住居確保・生活に必要な支援、生活オリエンテーション等10項目 |
| ③コスト増加 | 人材紹介会社等の登録支援機関を利用すると手数料が発生 |
| ④宗教・文化への配慮 | 宗教行事や食事、時間感覚の違い等への配慮 |
| ⑤住居の確保 | 条件にあった住居の確保、生活必需品等の準備 |

5. 特定技能外国人材の派遣による活用

通常では、特定技能外国人材を雇用する場合、直接雇用が基本となります。1週間5日以上、年間217日以上、かつ週30時間以上就労することが求められます。このため、パートやアルバイト（*1）のように、短時間就業するような雇用形態では受入できません。

しかし、農業分野においては、一定の条件を満たすことで、派遣形態で特定技能外国人の受入が可能になります。これは農業が季節による作業の繁閑差があることや繁忙のタイミングが全国の産地により異なることから、派遣による短期的な就業を認め、繁忙に合わせて複数の産地間において労働力を融通することを可能としているものです。



*1 在留資格によって異なります。例えば、コンビニ等で働く外国人は留学__在留資格（就労不可）、週28時間以内（残業含む）などの制限があります。

特定技能外国人材を派遣形態により受入れる場合の要件

- ①労働や社会保険、租税に関する法令を遵守していること
 - ②過去1年以内に特定技能外国人と同様の業務にあたる労働者を解雇していないこと
 - ③過去1年以内に派遣先の責任により行方不明者が出ていないこと
 - ④刑罰法令違反による罰則を受けていないこと等、欠格事由に該当しないこと
- ※上記の条件は特定技能外国人材を受入前はもちろん、受入期間中も要件を満たす必要があります。

特定技能外国人材を派遣形態で受入する前は、「文化や価値観が違うから…」「何となく大変そう…」「日本語…方言は大丈夫？」など、ネガティブな声が多く聞かれます。次に経費を質問して「たけー（高い）」って声が聞かれます。確かに、青森県最低賃金1,029円×8h×117%（社会保険料等）×24日＝231,155円（月額）と比較すると1.5倍以上高くなりますし、移動費（1回）も必要になります。外国人材の直接雇用であれば確かに経費は抑えられますが、その方が事務手続きや義務的支援等の手間が非常に増えることになります。

6. まとめ

今回は特定技能外国人材の派遣形態による受入を中心に概要を説明しましたが、実際に受け入れるとすると更に細かい部分まで確認する必要があります。また、派遣を依頼してから受入まで最低でも3カ月以上はかかることに注意が必要です。今後、ますます労働力不足が予想されることから、これまでと視点を変えたさまざまな対策を検討する必要があります。

（中央会 農業対策部）

組織農政通信

物流をめぐる動向とＪＡグループの取組みについて

１．はじめに

政府は、トラックドライバーの労働時間規制強化による輸送力不足に対応するため、令和７年４月１日、「流通業務の総合化及び効率化の促進に関する法律および貨物自動車運送事業法の一部を改正する法律」（以下、新物効法）について、一部を除き施行した。

新物効法では、令和７年４月より全事業者を対象に努力義務が課されるとともに、令和８年４月より特定事業者に対する中長期計画・定期報告の作成・報告等の対応が義務付けられることから、ＪＡ等が必要となる対応について紹介したい。

すべての事業者（努力義務）	特定事業者（義務） ※取扱貨物の重量９万トン以上
令和７年４月１日より施行	令和８年４月１日より施行
物流効率化の実践 ・積載効率の向上 ・荷待ち時間の短縮 ・荷役等時間の短縮	・物流効率化の目標と具体的な取組みを盛り込んだ中長期計画の作成、定期報告→ 不十分な場合、勧告・命令 ・物流統括管理者の選任 等

２．ＪＡ等が必要となる対応

ＪＡ・連合会等においては、本年度より努力義務に取組むほか、令和７年度末までに取扱重量を算定し、特定事業者に該当するかどうか判断する必要がある。

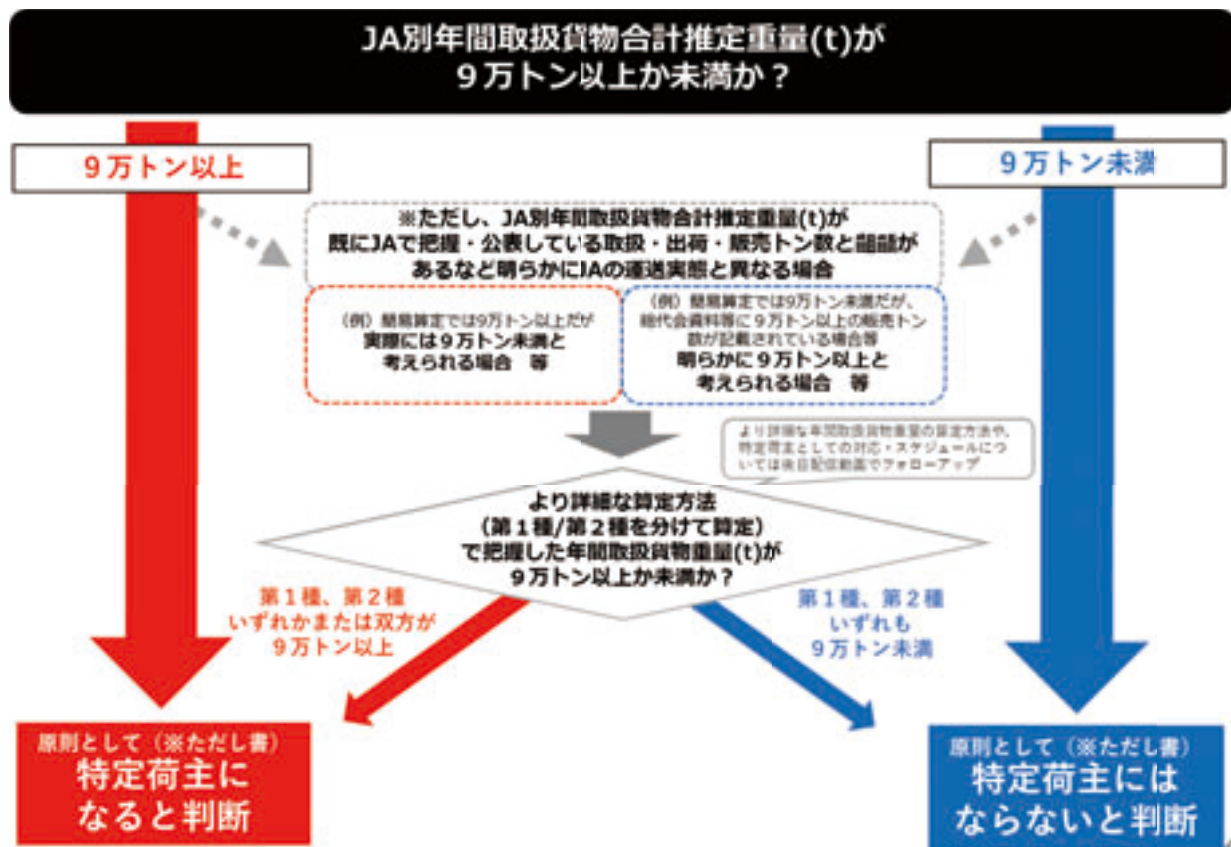
取扱重量の算定方法は国交省・農水省から示されているが、ＪＡ・連合会等においては取り扱い物品が多岐に渡り、作業が極めて煩雑となることから、ＪＡ全中より示された簡易算定方法を使用した算定を実施されたい。当該簡易計算方法では、ＪＡの計算書類等に記載される購買品供給高や販売品販売高を基に取扱重量を推定するものであり、算定結果が９万トン以上であれば特定事業者に該当するものと判断し、中長期計画の作成等の義務化に向けた対応が必要となる。

【簡易算定方法による算定例】



（第３回ＪＡグループ物流に関する説明会 農水省資料より引用）

【簡易算定方法におけるフローチャート】



(第3回JAグループ物流に関する説明会 農水省資料より引用)

3. 最後に

新物効法への対応に向け、農水省・経産省・国交省は「物流効率化法」理解促進ポータルサイトにおいて、物流パターンごとの荷主の考え方や特定荷主向けの対応の手引きおよび中長期計画書のひな型等を公開していることから、参考にされたい。

また、JA全中で実施する財務モニタリングの結果から簡易算定を実施した結果、太宗のJAにおいて特定事業者には該当しないとの結果であったが、簡易算定で9万トンに近い値となったJAについては、より厳密な検討・判断が必要となる。本会では、JAにおける簡易算定の支援および情報収集を進めていきたい。

(WEB サイトリンク)

<https://www.revised-logistics-act-portal.mlit.go.jp/>

(中央会 農業対策部)



経営の窓口

～サイバーセキュリティの取組みについて～

1. はじめに

あらゆる社会経済活動がサイバー空間を通じて非対面・非接触で行われるものへと大きく移行する現代において、サイバー攻撃は年々増加を続けており、ウイルス感染・不正アクセスによる情報漏えい・紛失事故は過去5年で約4倍に増加した。対策が進められていない組織を中心に標的となり被害に遭う恐れが高く、脆弱性対策・バックアップ確保等が十分でない場合、業務停止・情報漏洩など被害が甚大となる傾向にある。

令和6年10月、金融庁が「金融分野におけるサイバーセキュリティに関するガイドライン」（以下、金融庁ガイドライン）を制定したことに伴い、各JAが自らのサイバーセキュリティリスクに応じてリスクベース・アプローチを採ることが求められている。

ウイルス感染・不正アクセスによる事故 発生推移



2. JAグループにおけるサイバーセキュリティ強化の取組方針

令和7年5月、金融庁ガイドラインの制定、監督指針の改定を受け、JAグループとして対応の基準となる「JAにおける『情報セキュリティ管理体制の構築』ガイドライン」を改定した。

足元においては、サイバー攻撃への対策として、インターネット分離、Webサイト改ざん検知、事案発生時の連絡体制整備、ファイアウォール緊急点検等のリスク顕在化事象への対応取組みの徹底が最優先となるが、全国一律のセキュリティ水準ではないJAの経済事業システムや各システムを繋ぐネットワークやOA環境はセキュリティ水準も区々であるため、まずは実態把握を行い、それを踏まえた自律的な対応が必要となる。

これを受け、リスクベース・アプローチの出発点としても必須となる、JA自身による円滑な現状把握のため、令和7年度より自己診断ツールを導入した。自己診断ツールは、金融庁の地域金融機関向けセルフアセスメントに準拠した項目を網羅しており、各JAが行うリスク評価、安全管理、経営体制および内部統制について問うものとなっている。

令和7年度は実態把握に主眼を置き、そこから見えてきた課題に関して、JA全中・農林中金等全国連にて整理を行い、翌年度以降の具体的なJAでの取組みに繋げていく方針である。

3. さいごに

サイバー攻撃については、対岸の火事ととらえるかもしれないが、令和4年には秋田県のJA大湯村がサイバー攻撃を受け、同JAは個人情報流出した可能性があると公表した。

サイバー攻撃への対応は平時から備えておくことが重要である。組合員からの信頼を守り、事業の継続性を確保するためにも、本会から提供している講習動画を視聴する際には、併せて各JAのサイバーセキュリティの管理体制の確認等をしていただきたい。

（中央会 経営対策部）

合併15周年記念グラウンド・ゴルフ大会

J A ゆ う き 青 森 年 金 友 の 会 は 8 日、東 北 町 北 総 合 運 動 公 園 で 合 併 15 周 年 記 念 グ ラ ウ ン ド ・ ゴ ル フ 大 会 を 開 催 し た。当 日 は 天 候 に も 恵 ま れ、37 人 が 熱 戦 を 繰 り 広 げ た。

J A の 原 子 孝 代 表 理 事 常 務 は「15 周 年 を 記 念 し て 豪 華 賞 品 も 用 意 し て い る。ケ ガ の な い よ う に 楽 し く プ レ ー し て ほ し い」と あ い さ つ。参 加 者 は 8 チ ー ム に 分 か れ て 24 ホ ー ル の 競 技 で 親 睦 を 深 め た。

上 位 入 賞 者 に は「青 天 の 霹 靂」10kg 等 が 手 渡 さ れ た ほ か、合 併 15 周 年 を 記 念 し て 団 体 戦 で 優 勝 し た チ ー ム に も ナ ガ イ モ 5 kg が 贈 ら れ た。

参 加 者 は「他 の 地 域 の 人 と の 仲 良 く プ レ ー で き て 楽 し か っ た」と 話 し た。



プレーを楽しむ参加者ら

六ヶ所村青年農業経営者協議会 地元小学生 稲刈り体験

六ヶ所村青年農業経営者協議会は9日、J A ゆ う き 青 森 の 協 力 の 下、六ヶ所村の圃場で小学生を対象に稲刈り体験を行った。児童らは、鎌の使い方や刈り取り方を教わりながら収穫を楽しんだ。

体験会は、農業に関心をもってもらうと、収穫作物を変えながら毎年実施している。今回は千歳平小学校と南小学校の5、6年生41人が参加した。

次々と黄金色の稲穂を刈り取った後は、コンバインによる刈り取りと脱穀の様子も見学。児童は「はじめは難しかったが、慣れてくると楽しかった」と笑顔で語った。

同協議会は10月下旬にゴボウの収穫体験を予定している。



黄金色の稲穂を手に喜ぶ児童ら



輝き

JA全農あおもり
りんご部りんご課
こじま そうし
小嶋 綜志 さん

●プロフィール

2024年4月から勤務 青森市出身 25歳

— 働くきっかけは？ —

大学時代りんご農園でアルバイトをし、そこで働く農家さんのために何かできることはないかと考えた際に、本会を見つけ飛び込みました。

— 業務内容を教えて下さい。 —

精算業務です。
お金の管理のミスはできないため、毎日慎重に精算をしています。

— 働いた感想は？ —

精算をするとき、取引会社の方にもチェックをしてもらうのですが、その際「ミスが少なく助かるよ」と喜ばれたのが嬉しかったです。

— 仕事をする上で、日頃心がけていることは？ —

ミスをしないよう二回以上はチェックをすることです。
ミスをするとそのミスを取り返すために倍以上の時間を要するときがあるため、確認は何度もしています。

— 特技・趣味は？ —

趣味はラジオを聴くこと、バラエティー番組を見ることです。
何があっても笑いが救ってくれるため、私には欠かせません。

— あなたが自慢できることは？ —

ジャンプ力です。
農協会館には背の高い方がたくさんいますが、最高到達点では誰にも負けません。

— 将来の夢は？ —

海外に行きたいです。
人生で一度は海外に行き、世界を感じてみたいです。



信頼される産地 品質、安定供給さらに

JA津軽みらいときわにんにく部会は、旧JA常盤村でニンニクの栽培が盛んだことから、1982年に「常盤村農協ニンニク部会」として発足し、2008年のJA合併に伴い現在の部会名となった。発足当時は、強制乾燥機や乾燥用コンテナ、ニンニク用冷蔵庫の導入など、本格的なニンニク振興に取り組んだ。当初は常盤地区と板柳地区の生産者で構成されていたが、JA全地区まで広がり、現在の部会員数は91人、作付面積は約50%となっている。

部会ではこれまで、ニンニクの高品質栽培に向けて、優良種子の確保と土壌診断による土づくりに取り組んできた。また、生産者が適切な栽培管理や乾燥調製、収穫時期を確認できるよう講習会を開いている。ブランド力強化についても、部会員のブランド志向の高まりから登録商標に取り組み、2008年に登録商標「常盤」を取得。2021年には更なるブランド力強化を図るため、「ときわにんにく」で地域団体商標に取り組み、2022年2月に登録された。また、部会の活動を消費者へ伝えるため、フェイスブックなどのSNSを活用したPRも行っている。

今後は、今以上に市場との信頼を築くため、通年出荷に向けた生産量の増加と、安定供給体制の維持を目指す。また、消費者に信頼される産地を目指すため、高品質生産に努める。

対馬伸吾部会長（右）と
同JAの営農指導員（左）



新風

JA
つながる弘前

就農3年目のリンゴ農家
達成感糧に技術磨く

弘前市の工藤真依さんは、リンゴ栽培に取り組む就農3年目の新規就農者。

高校卒業後、関東で就職したが、4年前に退職し帰省。その後、知り合いのリンゴ農家から「人手が足りないから手伝ってほしい」と声を掛けられ、手伝いに行くことに。

摘果や葉取りなど作業箇所が目に見えてわかることに達成感と楽しさを覚え「リンゴ農家になりたい」と思うようになった。

実家が農家ではないので一人で農地探しから始め、知り合いから30㌦の農地と農業資材、農業機械を購入。手伝いである程度の作業は理解していたが、わからないことは知り合いのリンゴ農家やJAの営農指導担当に聞きながら進めていった。2年目には園地を1㍍に増やし、すべての作業を一人で行いたいという目標に向けて、今年から専門業者に委託していた薬剤散布を自らスピードスプレーを運転し行っている。剪定作業は難易度が高いため、講習会への参加や、知り合いのリンゴ農家から技術を学んでいる。

就農当初は、収入を得るためアルバイトを掛け持ちしていたが、現在はアルバイトを辞め、農業収入で生計を立てられるようになった工藤さんは「今は技術の習得に力を入れ、おいしいリンゴを消費者に届けられるよう努力していく」と意気込みを語った。



工藤真依さん

後編 記集

短い秋も終盤で、そろそろ雪が降る時期が近づいてきましたね。昨年は大雪だったので今年は降りすぎないことを願うばかりです。

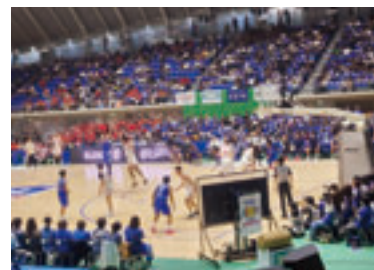
さて、10月4日にバスケットボールの試合「青森ワッツVS岩手ビッグブルズ」を観戦しに行きました。ワッツはホームでの試合ということで絶対に勝って欲しくて応援！シーソーゲームの末、勝つことができ、

接戦でとても見応えがある試合でした。

スポーツを「生」観戦したのは久しぶりでしたが、実際の試合を「生」で見ると、やはり迫力がすごかったです。

皆さんもお気に入りのスポーツチームを現地に応援しに行ってみてはいかがでしょうか。

Have a nice November (克)



ホームページアドレス

- JA青森中央会 <https://www.ja-aomori.or.jp/chuoukai/>
イベントの様子、歳時記、産直・JA情報などをご覧いただけます。
- JAバンク青森 <https://aomori.jabank.org>
商品・サービスのご案内のほか、マネーシミュレーションや全国のJAバンクへのリンク等をご覧いただけます。
- JA全農あおもり <https://www.zennoh.or.jp/am/>
生産量日本一のりんご・にんにく・ごぼうをはじめとした農畜産物情報や活動状況、中古農機情報を紹介しております。
- JA共済連青森 <https://www.jakyosai-aomori.jp>
JA共済のご案内のほか、地域貢献活動の取組を紹介しております。

日本農業新聞
電子版が

アプリでさらに便利に!

日本農業新聞ニュースアプリ



その日の記事を
すぐにチェック

最新の記事は
トップに大きく掲
載されます。読み
込み速度も速く、
読みたい記事に
すぐにアクセスで
きます。



※画面はイメージです



速報などを
プッシュ通知で
お知らせします。



スワイプで移動 /



カテゴリメニュー
がスワイプで簡単
に選択できます。

長押し+スライド
で読みたい順に並
び替えもできます。



カテゴリ記事に
簡単アクセス

動画で操作方法など説明

アプリへのログイン方法や特長
など、詳しい説明をご覧ください
ます。



アプリをダウンロードする

日本農業新聞公式ウェブサイ
トからダウンロードにお進み
いただけます。



お問い合わせ

日本農業新聞 電子版事務局
dkanri@agrnews.co.jp

※ アプリのダウンロードには「Apple ID」または「Googleアカウント」が必要となります。 ※ App StoreはApple Inc.のサービスマークです。 ※ AndroidはGoogle Inc.の登録商標です。



家の光

IE no HIKARI

「食と農」「暮らし」「協同」「家族」を柱に
「人生100年時代」の元気づくりを応援していきます!



読者に寄り添い
より身近で活用しやすく

お申し込みはお近くのJAへ

誌 名	定価(税込) ※毎号統一価格
家の光	900円

JAグループ 家の光協会 〒162-8448 東京都新宿区市谷船河原町11 TEL 03-3266-9039 <https://www.ienohikari.net/>